

こ お ず い せ き
郡 戸 遺 跡 の 調 査



2000.09.09



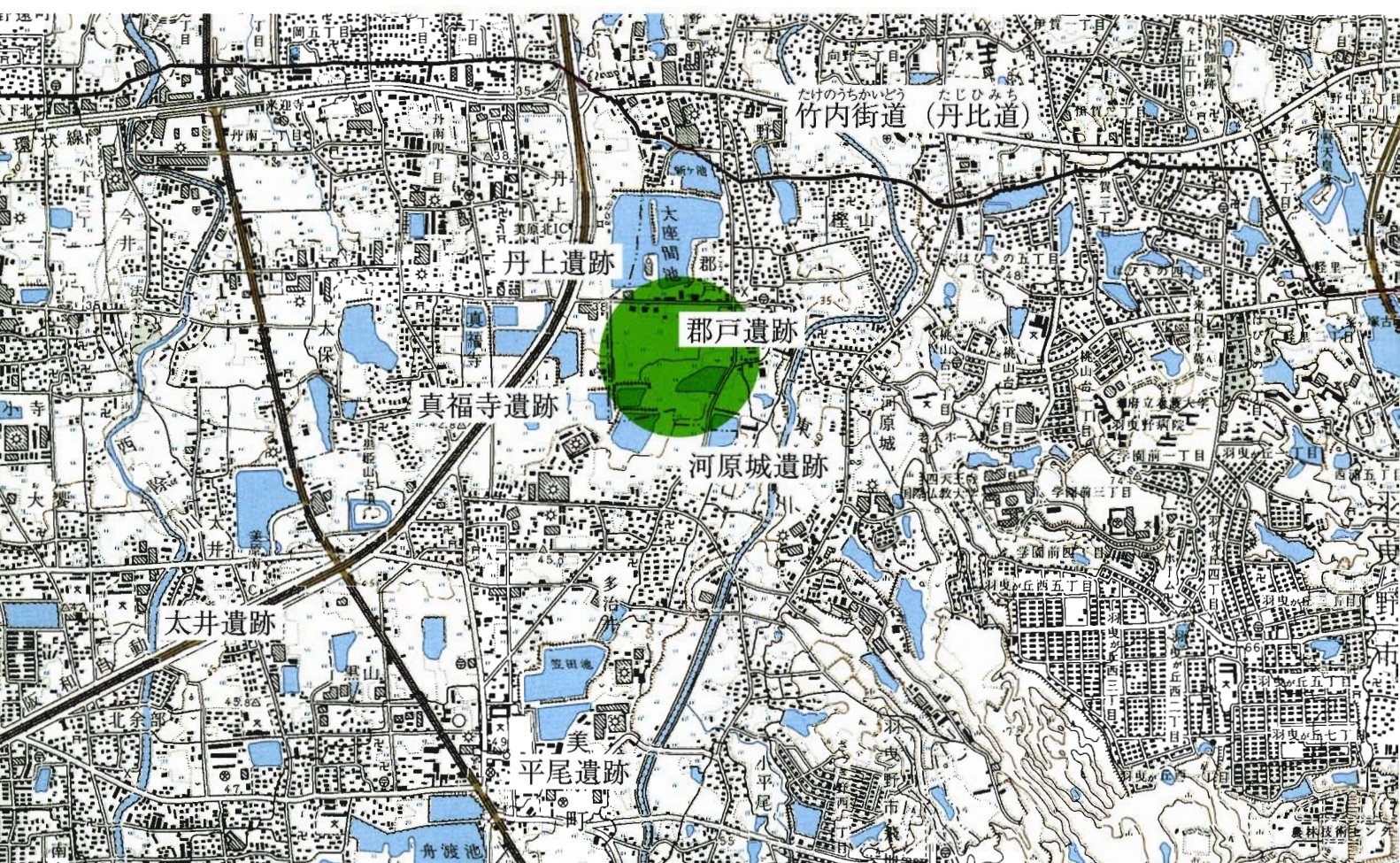
(財)大阪府文化財調査研究センター

こおず 郡戸遺跡とは？

郡戸遺跡は大阪府の南部、羽曳野市郡戸にあります。立地的には南河内の台地上に位置します。郡戸周辺は平安時代の『延喜式』によると「河内国丹比郡」に属しており、郡戸という地名から丹比郡の郡衙があったのではないかと推定されていました。これまでも昭和51年には南阪奈有料道路の路線内の分布調査が、平成2年には羽曳野市教育委員会によって発掘調査が実施されましたが、遺跡の性格や内容についてはほとんど不明でした。今回は南阪奈有料道路の建設工事に先だって発掘調査を行っております。調査は本年7月より始まり、飛鳥時代（7世紀）の掘立柱建物群や溝・井戸などがみつかりました。

みつかった遺構は？

今回の調査により、掘立柱建物8棟、柵列3列、溝3条、井戸1基、土坑1基がみつかりました。掘立柱建物の主軸は正方位（真北）より東に約14度振っており、一定の計画性をもって建てられていたことがわかりました。各建物の柱穴（柱を立てるための穴）は一辺が40～60cmの方形で、深さは40～50cm、直径約25cmの柱の痕跡もみつかりました。建物群は同じ軸をもつ東側の柵列や西側の溝にはさまれた幅約40mの限られた範囲内に建てられていました。また、建物2・4の南側からは直径約150cm、深さ110cmの井戸が、柵列3の東側からは不定形の土坑が検出されました。



郡戸遺跡と周辺の遺跡

(国土地理院1/25,000「古市」平成9年を使用)



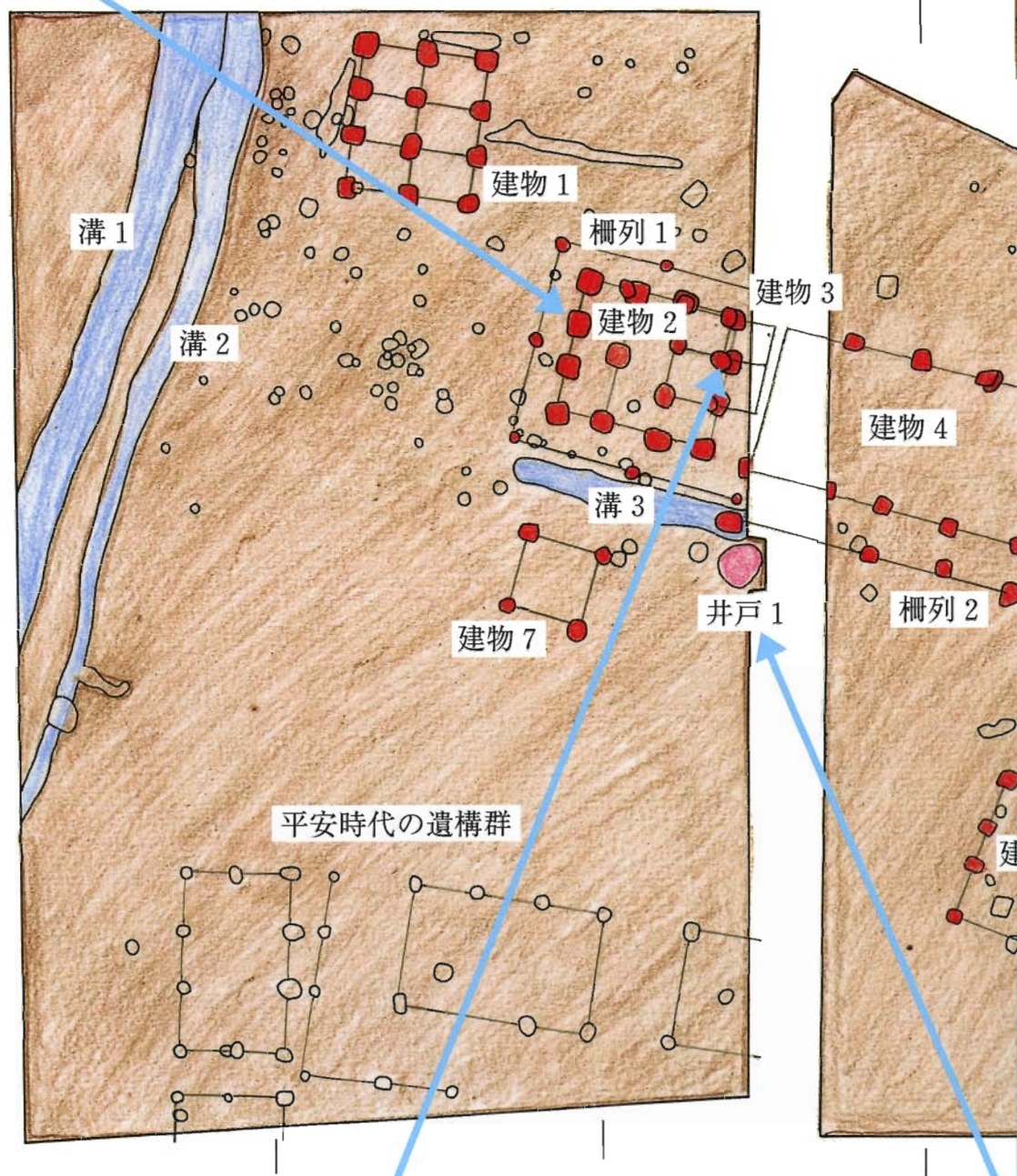
◀ 建物の柱穴の断面

X=-160,920 —

Y=-39,420

Y=-39,400

X=-160,940 —

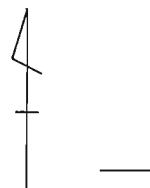


◀ 二つの柱穴の切り合い状況
 右の柱穴（建物2の柱穴）が古く、左の柱穴（建物3）が新しいことがわかりました。

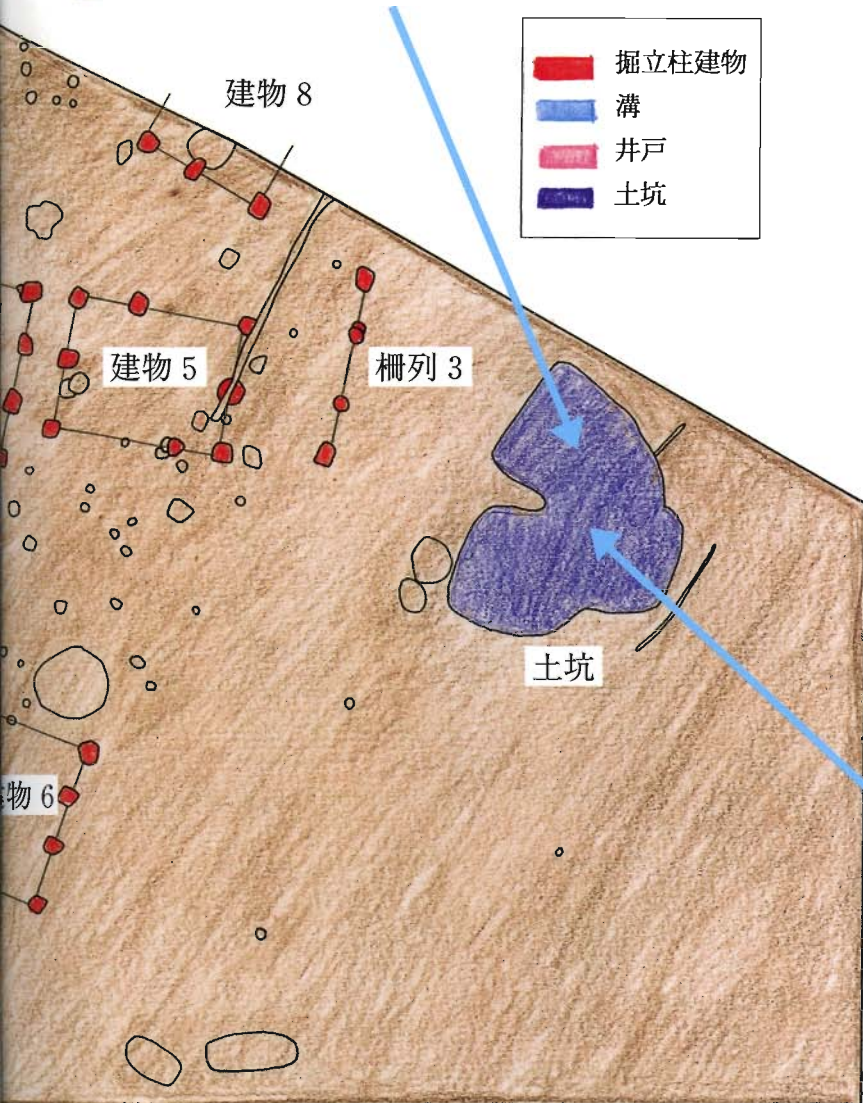




Y=-39,380



▲ 土坑より出土した砥石^{といし}



▲ 土坑より出土した
須恵器の杯の蓋^{すえき づき ふた}



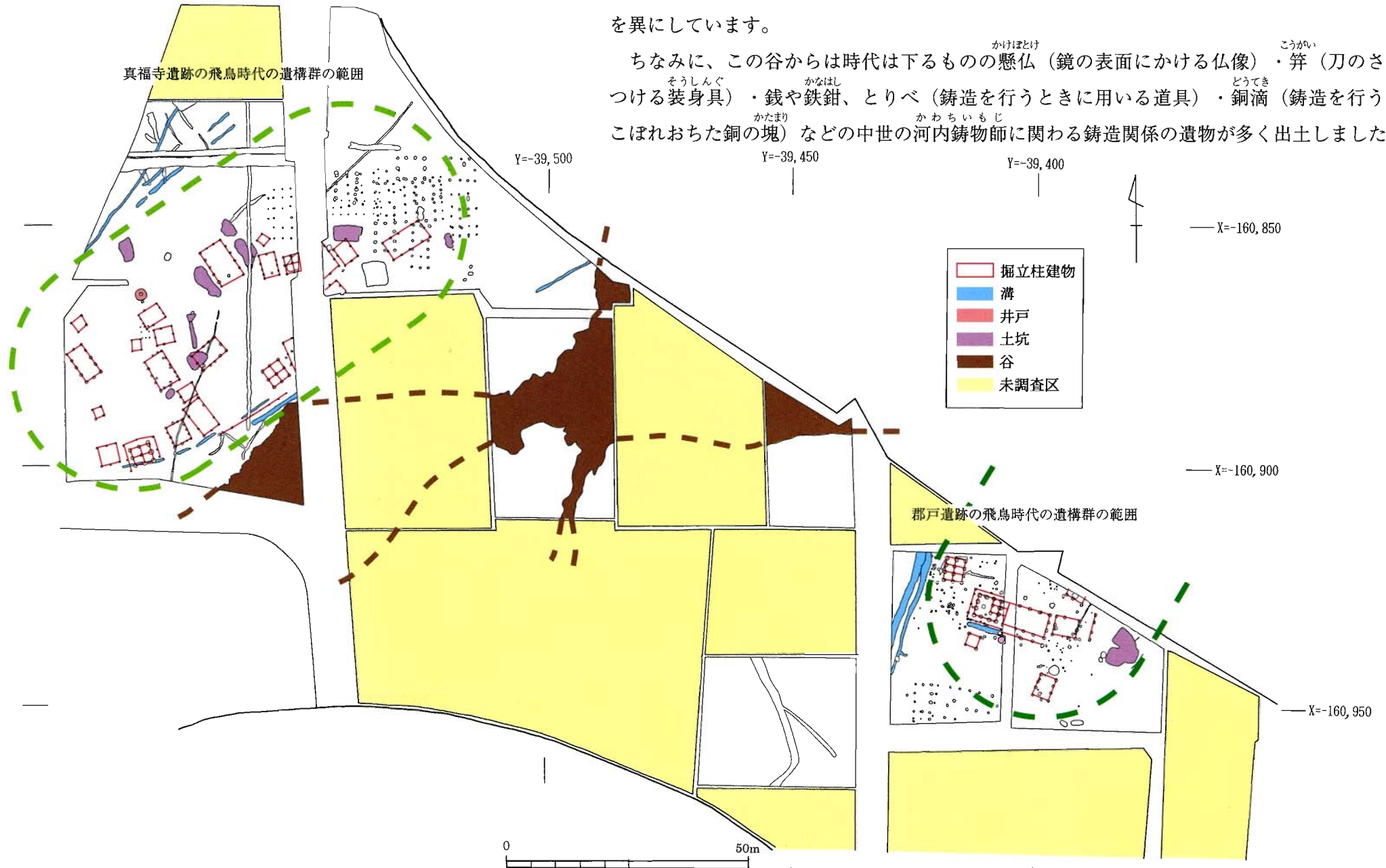
◀ 井戸の完掘状況
井戸の底より須恵器の鉢が出土しました。



郡戸遺跡（その1）遺構配置図

浅い谷をはさんで、真福寺遺跡と郡戸遺跡には飛鳥時代の掘立柱建物群があることがわかりました。しかし、真福寺遺跡の掘立柱建物群は西に約35度振る軸をもっており、郡戸遺跡とは軸を異にしています。

ちなみに、この谷からは時代は下るものの懸仏（鏡の表面にかける仏像）・筭（刀のさやにつける装身具）・銭や鉄鉗、とりべ（铸造を行うときに用いる道具）・銅滴（铸造を行う時にこぼれおちた銅の塊）などの中世の河内鑄物師に関わる鑄造関係の遺物が多く出土しました。



真福寺遺跡と郡戸遺跡（その1）の遺構配置図

みつかった遺物は？

今回はこのように多くの遺構がみつかったにもかかわらず、遺構の性格を決定づけるような遺物は出土しませんでした。ただし、少量ではありますが遺構内から飛鳥時代の須恵器の杯・杯の蓋・鉢・壺、土師器の杯・甕などが出土しました。また、この他に井戸からは人頭大の礫や古墳時代の埴輪片が、土坑からは砥石などもみつかりました。



郡戸遺跡より出土した土器

まとめ

今回の調査によって、これまでほとんど不明だった郡戸遺跡の様子が初めて明らかになりました。飛鳥時代の遺構は、限られた範囲に計画的に配置されていたことや、大型の建物群をもつことなどから、一般の農村集落とは異なった地域の有力な階層の人々が生活していたことが考えられます。そして、当遺跡の西側にある真福寺遺跡の掘立柱建物群とあわせて、この時期に台地上での開発が行われたことを示しています。次の奈良時代には郡戸遺跡の約 800 m 北側にある丹上遺跡で規則的に配置された建物群がみつっていますが、郡戸遺跡、真福寺遺跡共にこの時期の建物群はみつかりません。ところが、平安時代になると再び、郡戸遺跡や真福寺遺跡では掘立柱建物群が広がります。このように、飛鳥時代から奈良時代、さらに平安時代へと移り変わる時間の中で、この地域の景観がどのように変化していったかについて、これからの調査によってより明らかになることが期待されます。



真福寺遺跡より出土した土器



郡戸遺跡とほぼ同じ時代の遺物

南阪奈有料道路建設に伴う

郡戸遺跡の調査 郡戸遺跡現地説明会資料

発行 (財)大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号 ☎0722(99)8791

発行日 2000年9月9日

印刷 (株)中島弘文堂印刷所